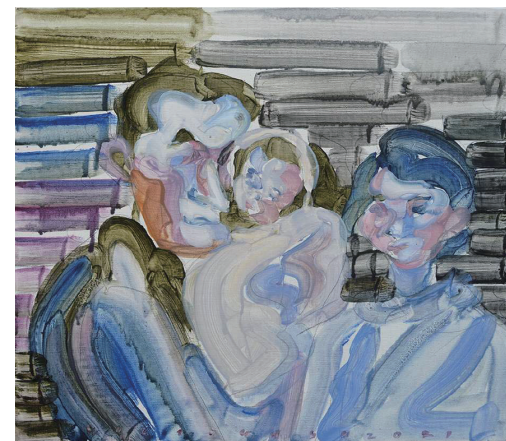




河正雄コレクション

つれづれ 徒徒

江上越・河明求 展



江上越「コミュニケーション-11」2021年



河明求「幸せなクジラ」2021年



市橋とし子「春探し」1951年
写真：市橋徹雄

2023年

2月 8日(水)

オープニングセレモニー 14:00～14:30

～ 2月 21日(火)

10:00 – 17:00

※休館日：日曜日、祝日

主催 駐日韓国大使館 韓国文化院

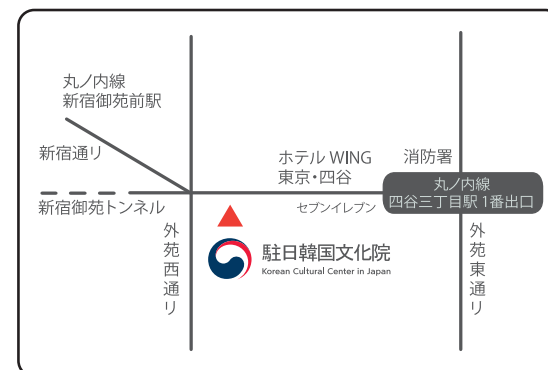
ギャラリーMI

〔利用案内〕

- ・ ギャラリーMI 月～土 10:00～17:00
- ・ 図書映像資料室 火～金 10:30～18:30、土曜日 10:30～17:30
※月曜日は休日、月曜日が祝日の場合は翌火曜日が休日
- ・ 韓国文化院事務局 平日 09:00～18:00 (昼休み 12:00～13:00)
- ※休館日 日曜日、祝日、年末年始、韓国の4大祝日
三一節(3/1)、光復節(8/15)、開天節(10/3)、ハングルの日(10/9)

〔お問合せ〕 駐日韓国大使館 韓国文化院
〒160-0004東京都新宿区四谷4-4-10
TEL : 03-3357-5970 (代) FAX : 03-3357-6074
HP : <https://koreanculture.jp>

〔交通案内〕 電車：東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目」駅1番出口より新宿御苑方面徒歩5分
都バス：早81番「四谷四丁目」停留所(原宿・渋谷・早大正門方面)下車後徒歩5分
品97番「四谷四丁目」停留所(品川駅方面)下車後すぐ



本展について

河正雄コレクションは、在日韓国人 2 世で実業家の河正雄が約55年かけて収集した1万2千余点の美術作品群のことです。河正雄メセナ(文化・芸術の支援)精神と「分かちあう心の美学」を実践している先駆者で、収集したすべての美術作品を韓国・光州市立美術館をはじめ、霊岩郡立河正雄美術館や埼玉県立近代美術館、秋田県立仙北市角館町平福記念美術館など、韓国と日本の公的な美術館等に寄贈しています。

一貫した方向性を持つ河正雄コレクションは、ディアスポラ(離散した民族)として歩んできた河正雄自身の人生が色濃く投影されている「祈りの美術」です。社会的・政治的に恵まれていない、疎外された人々や歴史の渦の中で犠牲になった人々を追悼する祈りと慰霊の意味を持っています。さらに在日韓国人として故郷に対する運命的なあこがれ、自分を生んでくれた祖国の文化と美術への恩返し気持が込められ、美術で韓国と日本を結ぶ懸け橋の役割をはたしている歴史的に貴重なコレクションです。

この度の徒徒展では、河正雄が仲間として一緒に行動し歩もうと次世代にメッセージを込めて、2021年・2022年にかけて収集した韓日若手作家の河明求作家と江上越作家の作品を中心に紹介します。

ギャラリー トーク



美術コレクター 河正雄

本展の作品を収集しましたコレクター河正雄、本展参加作家の江上越、河明求、そして美術評論家の千葉成夫様により、作品及び河正雄コレクションについて語っていただきます。

〔概要〕

日時 2023年 2月 8日(水) 14:30-15:30
場所 駐日韓国文化院ギャラリーMI(1F)
参加方法 当日に指定された時間にお越しください。
定員 先着順50名様

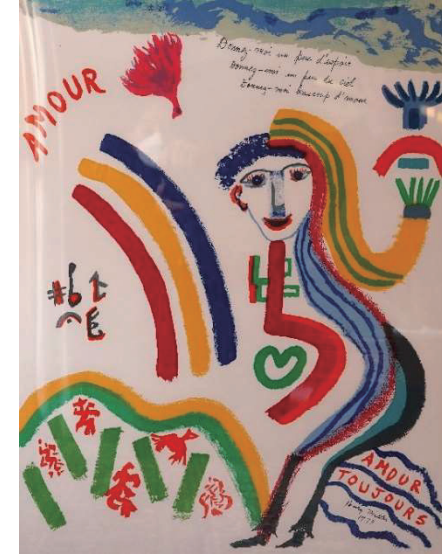
展示概要

〔会期〕 2023年 2月 8日(水)～2月 21日(火) 10:00～17:00
〔会場〕 駐日韓国文化院ギャラリーMI(1F)
〔休館日〕 日曜日、祝日
〔主催〕 駐日韓国大使館 韓国文化院
〔お問合せ〕 駐日韓国大使館 韓国文化院
〒160-0004東京都新宿区四谷4-4-10
TEL : 03-3357-5970 (代) FAX : 03-3357-6074
HP : <https://koreanculture.jp>

〔交通案内〕 電車：東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目」駅1番出口より新宿御苑方面徒歩5分
都バス：早81番「四谷四丁目」停留所(原宿・渋谷・早大正門方面)下車後徒歩5分
品97番「四谷四丁目」停留所(品川駅方面)下車後すぐ



河正雄コレクション



ヘンリー・ミラー「Amour Toujours」



許勲「金剛山」



全和風「牡丹」



李禹煥「色の位置」

●河正雄プロフィール

1939年 東大阪市生まれ。その後、小・中・高校時代を秋田県仙北市田沢湖生保内に在住した。
1959年 秋田工業高校卒業、在学中に秋田工業高校美術部を創設し、秋田市内高校絵画連盟会長として連盟展などを開催した。
1972年 株式会社かわもと(不動産賃貸業)創立。
1981年 韓国光州市盲人福祉協会、同会館(89年)設立発起人。その後ソウル国立博物館、光州市立、韓国朝鮮大学校、釜山市立、全羅北道立、霊岩郡立河(HA)、浦項市立、大田市立美術館に美術品寄贈。
1993年 光州広域市名誉市民証授受。
1995年 ソウル特別市名誉市民証授受。

2001年 終身光州市立美術館名誉館長就任。
2003年 韓国・朝鮮大学校美術学名誉博士学位授受。
2007年 韓国・朝鮮大学校デザイン大学客員教授就任。
2009年 全羅北道名誉道民証授受。
2009年 釜山市名誉市民証授受。
2019年 山梨県北杜市・市民栄誉賞授受。

仙北市田沢湖図書館には1981年より多年にわたって、数千冊の図書が寄贈されており、河正雄文庫として活用されている。母校である生保内小学校、中学校・秋田工業高校の校庭には「陽だまりの像」「憧憬の像」「明日の太陽像」が建てられている。後輩たちの健康な情操教育のために建立、寄贈されたものである。



河正雄コレクション「徒徒」展開催にあたって

駐日韓国大使館 韓国文化院 院長 孔炯植

この度、駐日韓国文化院では韓国と日本の美術発展に大きく貢献なさいました河正雄先生のコレクションの中から、両国の若手作家を中心とし、その他のコレクションを含め「徒徒」展と題し、ご紹介する交流展を開催する運びとなりました。

河正雄先生はこれまで1万2千余点の美術作品を集め、韓国の光州市立美術館、釜山市立美術館、霊岩郡立河正雄美術館、日本の埼玉県立近代美術館、秋田県立仙北市角館町平福記念美術館を含む韓国と日本の様々な美術館に収集品を寄贈され、両国の美術発展に寄与されました。

今回の「徒徒」展では、特にこれからの韓国と日本を繋ぐ懸け橋の役割を果たし、作家として大きく成長することが期待される両国の若手作家を中心に紹介します。河明求作家はユーモラスで機知に富んだ韓国のトッケビ（精霊・妖怪）や龍などを陶芸で表現し、江上越作家は河正雄先生の人生を絵画を通して再現しました。本展覧会を通じて両国の前途有望な作家たちが今後ますます成長する契機となり、文化交流が一層深まることを願っております。

最後になりましたが、この度の展覧会開催にあたり、熱意ある提案と作品を貸し出していただきました河正雄先生と展覧会を通して当院でご紹介できることになりました河明求作家、江上越作家をはじめとする関係者の皆様に感謝申し上げます。

境界を超え 響き合う 〈心〉

ジャーナリスト 菊地正志

江上越は日本、中国、ヨーロッパを中心に活躍する若手アーティスト。2021年4月、フォーブス・アジアが発表した「世界を変える30歳未満の30人」に選出された。令和2（2020）年度の文化庁新進芸術家海外派遣プログラムにも選ばれ、ニューヨークを訪れた。ここ数年、展覧会に出品された作品がすべて完売するという驚きの人気と実力を誇る。自身の豊富な海外体験から、「本当のコミュニケーションとは何か」について現代アートを通じて問い続けている。

河正雄は、在日韓国人の画家の作品を初めて広く認識させた在日2世の美術コレクター。生涯をかけて収集した1万5千点にもおよぶ美術作品を社会に還元（公的美術館への寄贈）することを通して、日本と韓国という〈二つの祖国〉を結ぶ懸け橋の役割を果たしてきた。コンセプトは平和への祈りであり、不幸な歴史の中で犠牲となった人々への慰霊だ。国境、民族、宗教などさまざまな〈境界〉を超えるヒューマニズムの精神が、河正雄の根底に流れている。

江上越と河正雄は2020年12月に初めて出会う。二人を良く知る美術評論家、千葉成夫が縁を取り持った。年齢も出自も異なる二人だが共に惹かれ合った。「若くて才能にあふれている。人の心を読む呪術師のようだ」と河正雄。一方の江上越は「輝き続けている人だ」と振り返る。二人の邂逅（かいこう）から、江上越が河正雄を描いた20枚の肖像画「コミュニケーション」が生まれた。

河正雄を描いた「コミュニケーション」は、江上越が試行錯誤の末にたどり着いた「にじいろ（虹色）」という作品群に入る。「にじいろ」はスピード感あふれる色鮮やかな幅広の線（ストローク）で構成されているのが特徴。具象表現が不可欠だった肖像画の既成概念を打ち破り、抽象的な線だけで江上越流の新しい肖像画を生み出した。千葉成夫は「社会と世界のなかで生きてきた河正雄の心模様であり、心の在り様である」「『心の窓』が開かれている」と評している。

では「にじいろ」とは何だろう。「虹とは夢と希望の象徴。それぞれの色は美しいが、けっして交わらない」と江上越。「共存の在り方を示している」とも話していた。いうなれば「にじいろ」は、制作者自身（江上越）と主題（河正雄）の「心の窓」をつなぐ虹の懸け橋ではないか。「国や民族、宗教、文化、言葉が違っていても、虹のように美しく輝くことができる」。そんなメッセージが江上越の作品から聞こえてくる。

一人一人違う人間の個性を認め合い、尊重する考えは人権とヒューマニズムの原点だ。江上越と河正雄の二人は、「心の窓」の最深部で〈人権とヒューマニズム〉が結びつき、響き合っているのではないだろうか。

韓国人アーティスト、河明求の〈ドッケビシリーズ〉はユニークでユーモラスな妖怪たち。粘土で作られた陶芸作品だが、河明求が子どもの頃から大好きなぬいぐるみにもよく似ている。ギョロリと丸く天を向いた目玉が愛らしい。しかし、単にかわいいだけの作品ではない。河明求の精神世界が表現されている。

「幸せ」がテーマの作品が多い。《幸せの呪文》《幸運の種》《幸せなクジラ》《幸せな亀》。タイトルこそ違うが、《白いウィザード》にも幸せの願いが込められている。「自分の考える『ドッケビ』のイメージと神秘的超能力を持っている魔法使いのイメージを融合し、皆様の幸福を祈りながら制作した」。河明求が書いた【物語】を読んで納得した。〈マスクシリーズ〉の《B i B i - M a s k》や《方相氏》も「魔よけ」の作品だ。

《回帰》の【物語】で日本と韓国の意外な共通点を知った。韓国の口伝説話に登場する「不可殺伊」は、日光東照宮の山門に彫られた「獺（バク）」と同じ霊獣ではないだろうか。共に悪夢と鉄を食べる。「国が乱れて戦争が起きれば鉄は武器に変わり、獺の食料は消え、飢えて死ぬ。獺が生きられるのは戦争のない世の中だけ。平和と軍縮のシンボルです」。そう話していた東照宮教学室長の言葉を思い出した。ドッケビは「平和」を愛している。

亀がモチーフの《誰かのための新大陸》には「夢を持って挑戦する者」へのエールが込められている。「新大陸を見つけるための旅だったが、泳いでも大陸は現れなかった」と説明がある。私の脳裏にはウクライナからの難民や故郷を追われたディアスポラが思い浮かぶ。「誰かが新大陸の夢を見て旅に出る時のために自分が新大陸になってあげたい」。その言葉に河明求の人類愛と希望を見た。

埴輪シリーズも独創的だ。古墳時代の埴輪を通して、過去、現在、そして未来を生きる人々の心をつなぐ。鳥をモチーフにした《現代のメッセンジャー》は特に印象に残る。「古代日本と韓国で制作されて鳥形の土器のイメージと融合したイメージを構想した」。祖国韓国と日本の懸け橋となり、両国の文化・芸術交流に尽力している若手アーティスト、河明求の〈心〉を感じてほしい。

(敬称略)



きくち・まさし ジャーナリスト、埼玉新聞社記者。
埼玉新聞社経済部長、文化くらし部長、編集委員などを
歴任。日本ジャーナリスト会議 (JCJ) 会員。著書に『ぼ
くらの遊び場—アフガンは今、そして…』。

コミュニケーションの本質

光州市立美術館名誉館長 河正雄

2020年11月29日の夜、FAXが届いた。

「千葉成夫先生からご紹介いただきました江上越です。私は海外での制作経験から誤解によるコミュニケーションの本質を追求する作品を作っています。昨日、私の千葉市美術館での展示で千葉先生とパリポンピドゥーセンターのキュレーターJulieと北京UCLA副館長と私でトークをしました。千葉先生から聞いた河さんの経験や生き方にとっても共鳴し、機会がありましたらお目にかかりたいです。私は12月3～6日に代官山ヒルサイドで展示があり、12月8～13日は千葉市美術館に在館しています。」

翌朝、「先程、千葉成夫先生からご連絡をいただき、河さんが12月8日に千葉市美術館にいらっしゃると聞き



ました。12月8日はお昼から美術館におりますが、午後2時はいかがでしょうか。私の展示は千葉市美術館1階のエントランスギャラリーです。」とFAXが届いた。私は12月8日、私のウィキペディアを編集してくれている竹内健太氏も北京での江上さんを良く知っているというので、同道して会った。

千葉市美術館エントランスギャラリーで江上さんの作品を始めて見た時、フランシス・ベーコン（1909年－1992年）の絵画をイメージした。ベーコンは写真や複製を参照しながら極度にデフォルメされた奇怪な人間像を、動きのある筆致と筆触を活かし、暗鬱な色彩と重厚な絵肌で表現するイギリス美術界を代表する作家である。

江上さんの作品には東洋と西洋が混在した色彩の流れが「河」になり、大胆な筆力は明確に人の本質である「心霊」を描いているように私には見えた。

「年明けの2月8日には令和2年度文化庁新進芸術家海外派遣のプログラムでニューヨーク・ロサンゼルスに発ちます。」と話ながら、「私のコミュニケーションプログラムに参加して下さい。」と誘われた。そして「この3個のドングリに白のマジックペンで、先ず河さんの名字を書いて下さい。そして一番大事にしている漢字を1個に1字書いて下さい。」と言われた。私が即座に「希」「和」と書くと、その意味はと問われた。

「私が生まれた1939年は私の祖国は日本の植民地創氏改名法が成立して本名が使えなくなり、日本名河本正雄として名乗る事となった暗い年であった。更に日本は中国と戦争をしていた。そして太平洋戦争が勃発し、日本の敗戦後に祖国は解放された。しかし南北戦争により同族が争い、分断国家となってしまった。故に生涯を無益な戦争に翻弄されない平和な世界を希求して生きて来た。国と国、人と人でも『和』こそ尊しとする誠心を以って、切実に祈念するのです。」と答えた。

そこで「ニューヨークに発つ前に与えられた時間内で私をテーマに一期一会の作品プロジェクトを成しませんか？」と提案したところ、心が通じ「この御縁を大切に、素晴らしいプロジェクトにしたい。」と快諾してくれた。

後日行われた取材後に「河さんの生きたどの時代の顔も等しく輝いている。」と言って作品制作に入った。2021年2月6日、「作品20点ようやく完成しました！自分が渡米前のベストを尽くそうと一生懸命制作しました。途中メールをしようとも思ったのですが作品制作を考えると、時間ももたないと感じ、没頭しておりました。」と報が届いた。そして2月9日、「無事ニューヨークにつきました。一面の雪景色でとても寒いです。作品はまだ完全に乾いていませんので、日本のアトリエで乾かしています。写真を整理しましたらまた送らせていただきます。」とメールがあった。

若き芸術家が全霊を尽くし、80代の晩節を彩った作品20点を製作したことは慶賀なる記録である。私の人生哲学を投影した「心霊」を「靈魂」として描いた江上芸術の旅路に幸あれと祈念する。

心の皺－江上越による河正雄

美術評論家 千葉成夫



千葉成夫 (江上越)

(1) 肖像表現

現代以前、つまり写実主義が生きていた時代なら、肖像画とは兎にも角にも「眼に見えるその通り」に描く、つまり現実を再現するものだった。依頼主なり観客も、とにかく「似ている」ものであれば（例えば高齢で容貌が崩れつつあるような場合なら多少の手加減はしたかもしれない）、それでよかった。それゆえ、写真登場以降の現代では肖像画は存在しえない、とも言い得る。江上越にとってそれは常識である。

江上越にとって「肖像画」による探求は初めてではない。もうかなり長く人の顔を描いてきている。ただ、今回のような、(基本的には) 一人の人物を数多く描くのは新たな試みである。しかも都合があって短期間に複数制作しなければならなかった。彼女は努力して 20 点を制作した。ただし、彼女にとって一貫している「コミュニケーション/ディス・コミュニケーション」というテーマが変わったわけではない。このシリーズはきわめて特異なものとなった。

(2) 稀有な提案

この制作を考え、彼女に依頼したのは河正雄である。彼は美術にたいする広く深い理解があり、自分の肖像画が写実主義的なものにはならないことを承知のうえでこの企画を考え、彼女に依頼した。つまり彼は、自身の顔を写真のように描いてもらいたいわけではなかった。はじめから様式なり表現方法は作家に任せていた。この若き美術家は、北京で学んだ時に、同じ漢字を使いながら意味が違うことから生じる「行き違い」体験について考えていくなかで、自身の作品の「主題」を見出してきた。以来、主題は一貫している。河正雄は、自身と在日が闊してきた体験を、肖像画という形式のなかでどのように表現してくれるのだろうか？ そういう関心と期待を抱いていたにちがいない。

この提案したいが稀有である。そのキッカケを作ったのが僕だったから言うのではない。河正雄という並外れた人物の大きな度量ゆえに生まれ、そして実現した提案なのである。

そうはいっても江上越が引き受けなければ、これは実現しなかった。しかし、彼女もまた、時代と環境は異なるけれど、漢字を共有する中国への留学時にさまざまなコミュニケーション・ギャップに遭遇し、苦労し、悩み、それを自身の表現の主題にすることになった。その点で、河正雄に共感するところが少なくなかったに違いない。いわば人生の「主題」は両者に共通していた。たんに共通しているというのではなく、彼女もまた類似の状況のなかで生まれて生きてきたと言い得る。「コミュニケーション/ディス・コミュニケーション」という主題は、彼女にとっては自身の生活のなかで蓄積されてきた現実と重なるところがある。それが、彼女のこれまでの肖像画の場合とは少し、あるいはかなり異なる点である。

彼女は彼に、まず沢山の写真を見せてくれるように頼み、それをもとに、彼の話に耳を傾け、ときおり質問を投げかけ、絶えずメモを取る。それらをもとにして、彼女はこの 20 点のシリーズの絵画を描いた。

(3) 絵画の構造

彼女は「肖像画」シリーズをずっと続けてきているのだが、最近の個展「君の名は」(2019年11月)で一つのかなり明快な方向性を示した。それは、肖像画という本来なら具象性が不可欠な絵画のなかにいわばある種の抽象的な構造を作り上げようとする試みということである。

具象(現実再現)という描法は賞味期限がとっくに切れているから問題外だが、彼女は一方では「具象(現実再現)」という意味ではない、人物の「具体性」をなんとか表現したいと考えている。同時に、他方ではその「具体性」を絵画の構造じたいと重ね合わせてみたいと思っている。そうしないと、現代では絵画たりえない現実がよく解っている。ちょっと言い方が難しいかもしれないので少し砕いてみるが、人物そのものを彷彿とさせながら、かつ「具象(現実再現)」にならないように描いてみたい、ということなのだ。「外見」だけ似せても、というより「外見」だけ似せることは、結局それだけに留まってしまって、その先へまでは進まない。20世紀に明瞭になった写実主義の終焉がそのことを証明している。

いま求められているのは、外見ではない人物の「具体性」の表現にほかならない。それが可能になるためには、肖像画がまず絵画として(写真や似顔絵やイラストやマンガではなく)ちゃんと成り立つ構造が不可欠である。彼女が色彩を最低でも虹の七色、あるいはそれ以上にするのも、基本の「線」を一見抽象的に見えるヨコやタテのストライプにするのも、そこに絵画が絵画として成り立つために最低限必要な「構造」を生み出すためにほかならない。その先は、彼女にとって(も)未知数とっていい。今度の連作で彼女はそのことに挑んだ。



図1 《コミュニケーション-12 HA1966》



図2 《コミュニケーション-15 HA1955》

(4) 星と惑星

この20点を通覧すると、提供された写真アルバムのなかから選んだ写真を元にしながら、河正雄の生涯を辿っていること、そのために時に家族が登場すること、その「家族の登場」はしかし「肖像」が目的ではなくて家族間の「親和」、言い換えるなら「コミュニケーション」を描いていることが解る。そしてさらに、家族以外で顔が正面から描かれているのは極めて関わりの深かった友人(西木正明)ないし知人(李禹煥)に限られていることが解る。そして、それ以外では締め括りとして江上越とのツーショットがあるだけであることが解る。この20点目は一種の「署名」とみなしてもいいだろう。それらはすべて、「具体性」の表現のための試みでもあり、同時にそこに「構造」を実現するための試みでもある。

全体を見終わると、おそらく河正雄の生涯のことを知らない人々でも、彼がどういう生涯を過ごしてきた人間なのかが、おぼろげながらも解るだろう。感じられるだろう。具体的に解るといのではないにしても、彼の心と魂と願いとが、いうならばそれそのものとして、一つの構造を成している空間、つまり絵画空間のなかに表現されていることが、見る人には伝わってくる。江上越が「河正雄」に見たものが、伝わってくるのである。

興味深いことがある。この20点では、河正雄の顔(と姿)だけ描いたものが8点と、ほぼ全体の半数に近い。そのうちの6点は顔と姿だけで画面いっぱいである。それ以外の12点は家族と一緒に、友人・知人と一緒に、(いわば)仕事と一緒に(2点=図1《コミュニケーション-12 HA1966》と図2《コミュニケーション-15 HA1955》)か、である。このように二つに大別してみるとだいたい半々になったことじたいは偶然かもしれない。偶然だろうけれど、僕には、画家の関心の中心はやはり「河正雄その人」であり、同時に「コミュニケーション/ディス・コミュニケーション」でもあることの現れだと見える。当然である。人は個であり、かつ個ではないからだ。画家は、彼女は、対象ないし主題の核心をこそ掴もうとする。中心の星を描き、そしてその周囲に惑星を散りばめる。

(5) 眼は心の窓

ここでは前者の8点、つまり「星々」について見ていきたい。

「星」の最初の6点は幼児期から青年期への成長を辿るかのようだ。後の2点は60歳代と80歳代のものである。この8点を繰り返し見てみる。もちろん脳裏には他の12点に描かれた河正雄の「顔」が絶えず去来している。

モデルがきわめて旨く捉えられていることに、僕はまず驚く。現実再現に似ているという意味ではない。その「人となり」の枢要なところ、その肝心なところがかなりの確に掴まえていると見える。画家はきっと直感的に描いているにすぎないのだが、その結果に僕は舌を巻く思いがする。

人の顔は嘘をつけない。どんなに顔面全体を総動員しても、「眼（まなざし）」だけは偽ることができずに本当のことを語ってしまうものである。そのことを知ってか知らずか、この画家は8点のすべてで「眼（まなざし）」を直接的に描くことを避けている。いや、「コミュニケーション/ディス・コミュニケーション」を主題にしてきた画家には、これは失礼な言い方というものだろう。画家はちゃんと解っていて、「眼（まなざし）」そのものの描写を避け、顔を全体として描くことに集中したにちがいない。

その結果、ここでは「心の窓」が開かれている。このシリーズが「肖像表現」として成功しているいちばん大きな理由はそこにある。

もちろん、描き方のことも言うておかなければなるまい。ほとんどの絵で背景は横のストライプだが、それは抽象的で機械的なストライプではなく、少し丸みを帯びたストローク（筆触）であり、色彩も一色ではない。そればかりでなく、そのストロークはしばしば人物の衣服、また顔そのものをさえ構成する要素になっている。つまり画面全体がこのストロークで成っているとさえ言い得る。それにも拘わらず、あるいはそれだからこそ、画家の作品は現実再現性を免れながら「具体性」を獲得している。この「具体性」、あるいは「現実性」こそが、「眼（まなざし）」が描かれていない肖像に「口ほどにも」ものを言わせている。

(6) 嵐と衝動の時期

1歳の子は口もとと顔全体にある意志の強さを感じさせる。それと同時に、身体全体の表現は未だ環境のなかにたゆたっていることを示している（図3《コミュニケーション-1 HA1940》）。だが9歳になると、この少年は眼もとと口もとに聡明さと意志の強さを明確に示しており、同時に顔の全体にはある種の哀しみの影がすでに現れている、そんな強い感触を漂わせるように表現になっている（図4《コミュニケーション-3 HA1949》）。

この感触は14歳になるともっとずっとはっきりして（図5《コミュニケーション-4 HA1954》）、とくに右目の、口もとから左の鼻梁にかけて、現れてくる。世界は自分にとって決して宥和的ではないことがこの青年の身体の深くまで浸透している（《コミュニケーション-4 HA1954》）。しかし、彼はもちろん負けることはなく、強く前に進んでいこうとしている。



図3 《コミュニケーション-1 HA1940》



図4 《コミュニケーション-3 HA1949》

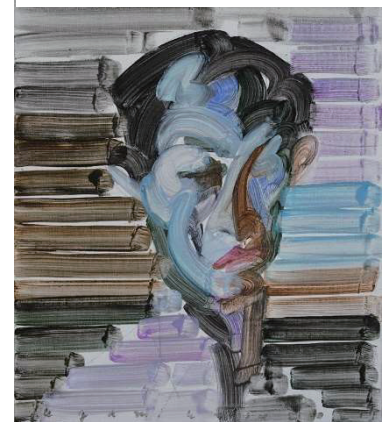


図5 《コミュニケーション-4 HA1954》

とはいえ多感な青春時代にはいろいろな事が起こるから、青年のなかでは希望と不安と喜びと苦難とが交錯する。そして底には常に「在日」の影がさして、冬のような厳しさを避けられない(図6《コミュニケーション-7 HA1958》)。

それでも、青年河正雄は良き伴侶に恵まれ、子供達も授かり、苦労は伴ったとはいえ、事業にも成功してゆく。それに伴って生活と心にゆとりが生まれていくことになる。

(7) 心の皺

そして、肖像画8点の最近の2点である。そのため江上を選んだ写真は2003年と2020年のもので、少し時間差がある。前者は韓国光州の朝鮮大学校から美術博士の学位を贈られた時のものであり、後者は今年の、自宅でのものである。江上が河正雄に初めて会ったのは2020年12月だから、8点目は(それだけが)本人を知ってから作品ということになるだろう。この2点は、前の6点のうちの最後のものと同じように、「顔」が画面全体を覆

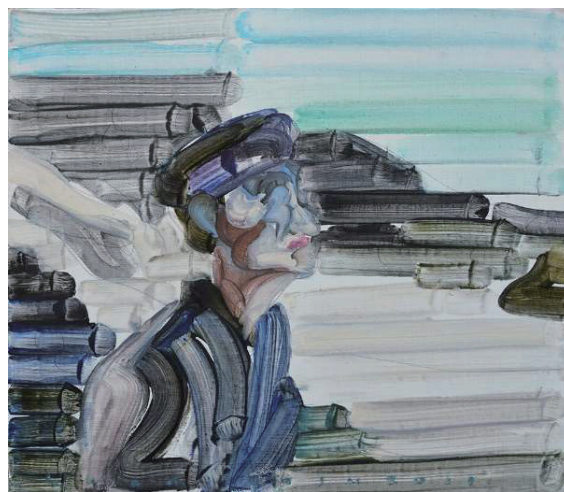


図6 《コミュニケーション-7 HA1958》

いつくしている点の特徴であり、印象的である。

そこに描かれている「顔」は、表面的には、年月を経て酸いも甘いも噛み分けた、そういう「顔」である。だが、どう言えばいいか、この人物の顔は生まれた時からずっと変わらないものを宿している。というかそれが、この「顔」の表面ではなくて「なかみ」を形作っている。

画家はそこまで表現し得ていると、僕には見える。この画家はまだ若いのだが、それでも、「コミュニケーション/ディス・コミュニケーション」を一貫して追いつけてくるうちに、この問題についての彼女の感覚はかなり研ぎ澄まされてきているのだ。表面ではなくなかみ—画家の眼はそういう「もの」、そういう「こと」を感得し、描き出す。上辺だけに流れる写実主義では出来ないことである。彼女は、このシリーズでは、自身の感覚が捉えた直感だけで描いていると言ってもいいだろう。その意味では彼女の絵はまだ成熟していないというか、まだ若々しいというべきだろう。それは美点である。この直感は何を語っているだろうか？

人はどんな時代に生きても、一人一人、それぞれ、さまざまな想いを心に刻んで生き、そして死んでゆく。心に刻まれた皺は、顔に影を、あるいは陰を、おとす。だが顔の実際の皺には身体と心に起こったさまざまな現象が間接的に(あるいは変形して)現れるので、心の皺をそのままあらわすものではない。喜怒哀楽は心のなかに入るとその形を変える。それに、「心」という、有るとも無いとも言い得るひとつの「ひろがり」は、一人の人間の身体に限定されていながら、同時にじつはそこに留まってもいない。まさしく他者達との「コミュニケーション/ディスコミュニケーション」の空間と時間にまで広がってもいるのである。この「有りながら無い」地平、「無いようで在る」地平が、心の皺の居場所であり、その在り方なのである。

河正雄の顔という対象(ふつうは「モチーフ」と呼ぶ)を前にして江上越の表現の試みをもたらしたのは、社会と世界のなかで生きてきた河正雄の心模様であり、心の在り様である。しかも「それ」が、写真や写実絵画などよりもずっと直接的に表現されている。僕にはそう見える。何故だろう？

泣いていたり笑っている人をそのまま描くよりも、眼に見える「こと」を、いわばいったん現実から解放する。喜怒哀楽の収まりどころを探す。だって、人は大泣きが収まると笑ったりもするし、大笑いが収まると泣き面を浮かべたりもする。喜怒哀楽は必ずしも四つにはっきり分かれているわけではない。それらは繋がりながら分かれている。感情は、心は、海のような広がりを実質としているから、その「皺」は波のようなもので、波の形状は千差万別であり、かつ、収まれば一つの広がりなのである。

(8) 表現の先へ

一人の在日として戦争末期から現在まで生き抜いてきた河正雄の生涯は差別、苦難、貧困、努力、達成、軋轢、葛藤、失敗、成功の生涯だったろう。子供の頃から絵を描くのが好きだった彼は、事情が許せば画家の道を歩んでいたかもしれない。それは断念せざるをえなかったのだが、それでも、彼は絵画・芸術にずっと関心を抱き続けた。

やがて努力と運にも助けられて余裕が出来る、在日の状況そのものを何とかしたい、そのために何らかの貢献をしたいとの想いで、さまざまな活動を始める。美術作品の蒐集もその一環である。まず在日の美術家達を援助するためである。ついで、韓日間の歴史の正しい相互理解の促進のためであり(美術作品は時に歴史の証言者の役割も果たしうる)、それを通して相互の文化交流に寄与するためである。さらに、多くの人々が美術作品に触れる機会を生み出すためである(美術館のみならず学校や福祉施設への寄贈など)。

もともと絵が好きで彼にとって、美術作品蒐集とはそれをステイタスとして誇るためでは全くない。蒐集した美術作品(だけではないが)のほとんど全てを、彼は韓日の然るべき施設・機関・場所に寄付してきていることは周知の通りである。それは、つまるところ韓日間の相互理解と宥和と親交を促進させたいという願いから以外ではなく、引いては世界の平和と安寧を願ってである。その努力は途切れることなく現在まで続いていることも周知のことである。

江上越は、そういう稀有な人物の「肖像表現」に挑んだ。その成果として、まったく説明的ではない、ありきたりの肖像画を超える、特異な「肖像表現」が生まれている。

そこには人間味溢れる一人の人物がいる。絵画表現以外ではおそらく不可能な、しかし通常の写実表現では不可能な、ひとつの「肖像表現」が成された。

絵の講評のように言うなら、彼女の肖像画は、地をなす横(ないし縦)のストライプのストローク(地)と、画面のほぼ全体を占める顔(図)とから成る。前者は整然と真つすぐだが、後者は、基本は前者と同じストロークなのだが、長さは短く、しかも曲がりくねっている。そうした、絵画構成というより(繰り返すが)「構造」の実現の努力によって、「地」と「図」が繋がりながら繋がっていないという緊張関係をそこに生み出している。そんなふうに言うことができる。この緊張関係が、僕が言うこのシリーズの「構造」の中核になっているのだ。例えば16世紀のジウゼッペ・アルチンボルドは春夏秋冬や地水火風などのアレゴリーのために人の顔を用いたに過ぎないから人の顔が描かれているわけではなく、背景は常に暗転である。つまりそこに空間の「構造」は無い。しかし江上越は河正雄の顔を描いているのだ。しかも、その表現からは不思議なことにモデルの人間味が流露している。

人はいつも緊張関係のなかに置かれて生きるほかはない。喜怒哀楽は、とくに「怒哀」や「寂漠」や「悲傷」などの方はすべて個たる人間が、人が個として、引き受けざるをえない。世の中はそう出来てしまっている。江上越が描き出しているのはそれをまともに引き受けて生きてきた人の顔の表現なのだ。しかもそれは、「顔」を「地」と「図」の関係のなかに置くことによってなのである。そこに彼女のこの肖像表現の特質がある。この「関係」を、例えば「社会」と「個人」とのそれというように読み換えてもいい。それは観客の自由である。

人が生きていくことの底に流れている無常観、そう言うもありきたりかもしれないが、そういう「感触」までをも彼女は表現しえている。年月を刻み込んだ人の顔は格別なものだが、絵画で、とりわけ近代絵画がもう終わっている現在では、それは容易なことではない。

千葉成夫 (ちば・しげお) 美術評論家。早稲田大学大学院文学研究科西洋美術史専攻博士課程単位取得退学。フランス、パリ第一大学博士課程留学(同・大学博士号取得)。東京国立近代美術館学芸員、中部大学教授を務めた。国内外の多くの展覧会企画等にも携わる。著書に『美術の現在地点』、『未生の日本美術史』、『現代美術逸脱史』など多数。2002年4月から美術批評雑誌『徘徊巷』を刊行。1946年岩手県生まれ。

江上越(Egami Etsu) Profile

- 2020 令和2年度文化庁新進芸術家海外派遣プログラム,
ニューヨーク・ロサンゼルス
中央美術学院博士課程在籍
- 2019 中央美術学院大学院修了, 劉小東教授に師事
- 2017 ドイツ HFG 大学留学, メディアアート学科専攻
- 2016 中央美術学院本科油絵学部卒業



江上越

■主な個展

- 2021 「Social Distancing」A2Z Paris, パリ
「FACE BOOK —Egami Etsu solo exhibition」Chambers Fine Art, ニューヨーク
「にじいろ——江上越個展」ホワイトストーン台北、台北
「にじいろ——江上越個展」軽井沢ニューアートギャラリー、軽井沢
「星の時間——江上越個展」銀座蔦屋書店、東京
- 2020 「エントランスギャラリーVol.1 江上越」千葉市美術館、千葉
トーク(パリポピドゥーセンター、千葉市美術館、UCCA 現代アートセンター)
- 2019 「君の名は?——江上越個展」, ホワイトストーン銀座新館, 東京
- 2018 「対話 4000 年——江上越個展」, 千葉市文化センター千葉芸術文化新人賞受賞プロジェクト、千葉
「Dialogue beyond 400 years-Etsu Egami solo exhibition」playground London, ロンドン
- 2017 「覆い隠された真相——江上越個展」日本東京銀座, 東京
「In to the light...Etsu Egami solo exhibition」βpace, ドイツ
- 2016 「天声人語?——江上越個展」DEHAIRIPROJECTS, 東京
「This is not a Mis-hearing game」de Sarthe gallery, 北京
「誤聴×真相——江上越個展」Horizon Art Space, 北京

■主なグループ展

- 2020 「VOCA—新しい平面の作家たち 2020」, 上野の森美術館, 東京
「3331 アートフェア 推薦展」, アーツ千代田 3331, 東京
「Little Fables」, ホワイトストーンギャラリー香港, 香港
「CAF 賞 2020 ファイナリスト」, 現代芸術振興財団、東京
「Gallery Collection」, ホワイトストーンギャラリー本館, 東京
「Spring Accent」, ホワイトストーンギャラリー台北、台北
「UNSCHEDULED」, 大館当代美術館, 香港
「Para Site Art GALA」, Para Site, 香港
「江上越 バーチャルスタジオビジット」, 台北当代博覧会, 台北

■主な受賞歴

- 2021 フォーブス アジアが選ぶ「世界を変える30歳未満の30人」受賞 (Forbes Asia)
- 2020 令和2年度文化庁新進芸術家海外派遣プログラム, ニューヨーク
フォーブス チャイナが選ぶ「世界を変える30歳未満の30人」受賞 (Forbes China)
遠山正道コレクターズプライズ受賞(3331 アートフェア)
CAF 賞 2020 ファイナリスト(現代芸術振興財団)
- 2019 アジアンアートプライズ 2019 Finalist(Sovereign Art Foundation 香港)

- 第五回芸術生活優秀卒業制作賞(中央美術学院)
- WAN YING ART DREAM 新鋭作家入選(万営美術館)
- 2018 第16回千葉市芸術文化新人賞(千葉市文化振興財団)
- 2017 最優秀優秀賞
- 2016 第12回「画室開放日」作品優秀賞受賞(中央美術学院油絵系)
- E.LAND 優秀卒業創作賞(中央美術学院)
- 第17回東方国際美術展(日本)外務大臣賞
- 2014 下郷優秀作品賞(中央美術学院)
- 社会活動賞(中央美術学院)
- 2013 優秀創作賞(中央美術学院)

■パブリックコレクション

中央美術学院美術館, 元典美術館, 樹美術館, E.LAND GROUP, 達美美術館, 和美美術館

■国際会議

- 2018 第2回北京国際メディアメディアビエンナーレ国際会議(CAFAMUSEUM)
- 海口仲夏文芸季 国際青年芸術論壇(海口市政府)
- 2020 「コミュニケーションのかたち」(千葉市美術館)
- 参加者: 江上越, Julie Champion(パリポンピドゥーセンター), You Yang(北京 UCCA 現代アートセンター), 千葉成夫
- 2021 「Etsu Egami: The third generation of post war contemporary artist」
- (アメリカ・ペンシルベニア州立大学でのアーティストトーク)
- 「星の時間」(銀座蔦屋書店)参加者: 岩淵貞哉(美術手帖総編集長), 山本浩貴(美術史家)
- 「星の時間」(銀座蔦屋書店)参加者: 河合正朝(千葉市美術館前館長), 陳睨怡(台湾芸術大学美術学院院長), 鄭妍(万営美術館アートディレクター)

■その他

- 2015-2016
- 中央美術学院博士課程 非常勤講師
- 2015 中央美術学院美術館 Roger Ballen 展アシスタントキュレーター
- 2016 中央美術学院美術館 Hiroji Kubota”The Story of Looking” アシスタントキュレーター
- 2017 北京工業大学 デザイン学科 非常勤講師
- 2018 北京工業大学 デザイン学科 非常勤講師
- 2019-2020
- 中央美術学院博士課程 非常勤講師

■主な出版及び執筆

- 2020 《交響的目光——西方絵画 500 年》上海書画出版社
- 《油画》人民美術出版社 2020 年第 2 期
- 《油画》人民美術出版社 2020 年第 4 期
- 《VOCA 展 2020 新しい平面の作家たち》上野の森美術館
- 2017 《月刊美術》実業之日本社
- 2016 《月刊美術》実業之日本社
- 《北方美術》天津美術学院 2 月刊
- 2015 《月刊美術》実業之日本社

河明求一芸術の高みに期待する

光州市立美術館名誉館長 河正雄

1980年代初め、私は銀座「日動画廊」で三輪龍作展を見た。ハイヒールを中心とした作品や「アムール・シリーズ」のエロチックなヌード作品など萩の伝統である「器」という世界からは異様で衝撃を受けた。今日では靴や衣服といった日常品を焼物でそっくりそのまま作り芸術性を問うことも珍しくないが、当時はハイパーリアリズムを題材とする陶芸が、まだ日本では作品として例がなく、通俗的な面白さとは異質なものだったが先駆性を感じた。芸術の基本的な性格、本質的な芸術の重要性を新しい陶芸の潮流として受け止めた。その時に求めた画集を長年、折りをみては書架から紐解いていたのは、常に気にかかる作家であったからだ。

2014年9月24日、河明求氏からメールが届いた。2002年に韓国の大学で「器」を中心として学び作業をしていたが、2009年頃から韓国と日本の焼物を研究し富本憲吉や八木一夫に憧れたことから京都市立芸術大学に留学し、土という素材や陶による制作をプロセスにする作品を研究しているという。

2018年4月7日、「丸沼芸術の森」主催の韓国文化院ギャラリーM1での「朝霞－8作家の出会い」展で注視した作家だった。そこに展示されていた彼の作品を見た時に、三輪龍作作品に抱いていた衝撃的な感覚と違う知的な感覚が甦った。時代を超えて共感共鳴する芸術世界を感じたのは良縁だったと言える。

その時、カタログに掲載されていた彼の制作論は彼の芸域に私を誘った。その展覧会で特に私の興味と関心を引いたのは、韓国と日本の持つ土地の記憶をテーマにした〈ドッケビ〉シリーズであった。

以下は河明求が語る〈ドッケビ〉シリーズに籠めるテーマと想いである。

〈ドッケビ〉は呪術的な信仰の一つであり、昔から韓国の民衆により伝来され、先祖たちの生き方や感性を共感できる象徴的な存在である。韓国の伝統説話の中でよく登場する〈ドッケビ〉たちは、人間に近い形象をして超自然的な力を持つ者で、悪くて人に害を与える鬼とは違う、人間のような心を持つ親しい神として描かれている。〈ドッケビ〉は今の時代にも漫画やドラマで制作されているほど、韓国ではまだ大衆的で象徴的な存在として人々の意識の中で生きている。／自分が制作している〈ドッケビ〉も「民族大百科事典」、「三国遺事」などの歴史資料を参考にして、無邪気な顔をしている者や、個性の強い表情をしている者が多い。／権威的で重い感じの神様の姿ではなくて、変化に富む人間の感情を代弁し、見る人に親しみと共感をもたらす存在としての表現を目指している。／また、〈ドッケビ〉とともに「時間」と「記憶」は現在の自分の概念と制作において、とても重要なテーマになっており、人間の物理的な生命より長く存在しているものについて興味を持つようになった。／もう消えてしまった過去の人との物語や、関係性をそのまま記憶している存在は、ある偉大な歴史書よりも自分に大きな感動とインスピレーションを与えてくれている。自分が興味を持っている物とは、昔の宗教用品や芸術作品などの特殊な目的を持っていた物だけに拘らず、過去の人の痕跡が残っている日用品などその対象は幅が広い。

彼の時代を超越し、意欲的に挑戦する陶芸への無限なる可能性に成果を見たい。三輪龍作作品に重ねて、芸術の高みを超える、私だけの夢や期待だけで終わらせたくはない作家である。

トッケビ達の集いー河明求の作品

美術評論家 千葉成夫

1

河正雄さんの紹介で、僕には未知の美術家だった河明求の作品を初めて見たのは、2021年の秋口、「丸沼芸術の森」でだった。日本の隣の韓国に生れ、陶芸を学び、イギリス留学の経験もあり、今は主に日本に住んで活動しているという。

河明求が作品の「モチーフ」にしているのは、一般名称でいうと「妖怪」ということになるのだろうが、そこには、日本の妖怪の「怖さ」めいたものが少しも無い。これはかなり驚きだ！一貫しているのはユーモアや優しさであり、彼の表現者としての特徴はそういうところに現れていると言っていいだろう。僕ら観客は、彼の作品を前にすると、眼と心が和やかになるのを感じる。彼は、韓国の普通の人々の感覚や心根の本質にそういうものを見ているということである。

例えば「仮面」。日本の仮面はほとんど怖いものばかりで、とくに「能」の仮面は、美女の面ですら怖いものが多い。さすがに大衆芸能には「ひょっこり」（男面）や「おかめ」（女面）があるが、怖くないのはそれくらいなものだろう。

だから、河明求が表現しているものは、「妖怪」というよりは、韓国語の「トッケビ」という語で総称したほうがよいような気がする。モチーフという意味では他に動物（豚、亀、虎、鳥など）、仮面、「不可殺伊（プルガサリ）」、「巨口鬼」と多様だが、それらも纏めて「トッケビ」と言えたい。

ユーモラスで優しい彼の「トッケビ」達の特徴のもう一つは、みんな「庶民の味方」である点だ。世界中どこでも、どんな時代でも、生きてゆくなかで一番の辛酸をなめてきたのは普通の庶民達である。彼らの辛酸の主原因は、一般論としていえばもちろん権力と富は「特権層」に集中してしまっていて、その皺寄せが庶民に行くからである。河明求は庶民の立場と目線で作品を作っている。「トッケビ」は、悪い権力者や貴族にいたずらを仕掛け、やっつけてくれる存在の象徴なのである。例えば《私が大好きな食べ物は悪い権力者です》という、「ヨンノ仮面」を元にした作品のようにだ。

2

動物達をモチーフにした作品も多い。豚、亀、鳥、虎などである。それらの作品に見られるのは「擬人化」ということなのだが、彼の場合は「擬人化」と言うだけでは物足りなく、動物達を人間に準ずる地平で捉えて表現しているように見える。動物達はいわば「〈人間〉」（人間ダッシュ）の存在になっているのである。例えば「勇気や威厳」のシンボルとして韓国で神聖視されてきた百獣の王である虎でさえ、彼の手にかかると、にこやかな《Mask series（青虎）》や、ちょっと自信無げな《Mask series（白虎）》や、お茶目でキュートな《Mask series（青虎）》として表現される。

ちなみに、日本列島には虎とかライオンといった類の動物は（少なくとも洪積世後期までは）存在しなかったので、人間との関わり合いは生じなかった。日本の民話にも「動物の擬人化」はあるけれど、そのほとんどは「鶴の恩返し」のようないわゆる「動物報恩譚」である。つまり動物

が人に恩を返すという話であり、しかも鶴は最後は人から離れていくというように、話は寂しさで締め括られることが多いようだ。韓国の虎、豚、亀、鳥などとはずいぶん異なっている。妖怪譚・民話・昔話・神話をめぐって、僕の眼が韓国と日本の違いの方に傾きがちなのは、つい比較してしまうからである。

それはともかく、僕は、河明求という美術家の、おそらく類まれな資質に注目している。どんなモチーフをも自身の柔らかい、穏やかな感性のなかに溶け込ませて、特異な表現として実現する才能がそこにある。

例えば「コロナ」の「マスク」(《マスク装飾人物埴輪》)とか「Wifi」のシンボルと「ハッシュタグ」を付けた鳥(《現代のメッセンジャー》)、さらには《ドラえもん形埴輪》などを見れば、彼のその才能は現代と未来の出来事やテクノロジーに対しても、また日本の社会状況についても、十分に発揮されていることが判る。

「色彩」の使い方にも彼の資質は明瞭に現れている。使っている色数は多くは無く、大きく分類するなら青・黄色味がかった白・陶土そのものの色、このほぼ三種類が基礎的なものである。それを、モチーフによって使い分けている。そのセンスがいい。

3

ところで、会場で見た《土偶付き長頸壺》と《土偶付き特殊器台》の印象が、僕のなかで何故か後を引いた。その印象はそのまま消えようとしていたのだが、のちに送られてきた作家の資料を見て、この「前者」は韓国の国宝第195号《土偶装飾長頸壺》に想を得ていると知った。それで思い出した、僕はこの作品を以前に図版で見たことがあった！ ネットで確かめてみると国立慶州博物館所蔵だった(註1)。

それはそれとして、僕は考古学は素人なのだが(美術史はやったが)、古代朝鮮の考古学ではそれは「異形土器」のなかの「装飾土器」に分類されている。この国宝第195号作品に表現されているのは琴を弾く妊婦、四つん這いの女性とその後ろに性器を露出させている男性(性行為で豊穡を示す)、蛙を追う蛇(辟邪の意味を持つ)、亀、鳥、などだそうである。

他方、河明求の作品《土偶付き長頸壺》にはマスクをして必死に壁を攀じ登っている人の土偶と、平和にゆったり構えている猫の土偶が表現されている。また《土偶付き特殊器台》の方は携帯を見ている二人の人物と、杖をついて腰が曲がり気味の老人の土偶で、上の部分には「サムソン」と記された丸い看板のようなものがある。作家の眼は常に現代の庶民達に注がれている。

4

《土偶付き長頸壺》と《土偶付き特殊器台》の印象が僕のなかで尾を引いたもう一つの理由は、この種の表現は半島ではかなりあるが、列島ではあまり多くはないのではないかという点にあった。古代においても現代においても、だ。

古代については、ざっと調べただけだけれど、「長頸壺」や「特殊器台」に土偶のようないわば「フィギュア」を(別途造って)くっつけることは、列島では(西日本の一部を除いて?)多くはなかったようだ。類似のものなかで、列島で知られている例は、倉吉博物館の《装飾子持壺付装飾器台》(註2)や奈良国立博物館の《装飾付器台付子持壺須恵器》(註3)くらいなものだろう(「子持壺」は小さな壺のこと)。前者には飾り馬に乗って鹿を追う人、相撲を取る2人、琴を弾く人物を置き、器台の縁に鳥、等を付けている。また後者の方は、4個の小壺を肩に載せた大壺を

5 段の器台部が支える、という須恵器である。土偶はその4個の小壺の間に馬2頭、猪1頭、鳥4羽である。

つまり半島の方が「作り」として豊かなのだ。飾ろうとか、もっと何か言いたい（表現したい）とか、そういう意欲が旺盛なのである。列島のように壺や器台の表面にヘラか何かで模様を入れるだけでは、半島の人々は満足することが出来ない。半島と列島は古代から関わりが深いことは言うまでもないのだが、「十年経てば山野も変わる」のだから人も変わる。河明求は、今は日本を拠点にしているけれど、生れと育ちはやはり韓国なのである。

5

現代美術では今は素材も方法も様式も自由だが、それでも、例えば河明求のように「陶」に託して表現をするのなら、然るべき理由があるだろう。普通の陶芸（現代工芸としての陶芸）と現代美術はやはり異なるからである。

彼はこの点についても明快である。彼が古代のものを取りあげるのは、「古代」から「現在」までの「時間」を「途切れない同じ流れ」として捉え直したいからだ。もちろん時代（時の流れ）は変化を続けながら現在に到っている。一人の人間の寿命は（平均値は難しいが還暦を頼りにいえば）たかだか60年くらい、それが三代繋がっても途切れないのは200年ほどにすぎない。だが、「人間より長く存在するもの」に着目すれば、「連続性」が見えてくる筈だ。彼はそういう視点から日常の、身の回りのものに着目する。古代の陶器の形を借りて、そこに意識的に現在の日常品（スマホ、老人の杖、インターネット・メディア、ドラえもん、マスク等）を持ち込むことを通して、過去との繋がり、「文化的記憶」を彷彿とさせることができるのではないか—それならじゅうぶん美術作品たりうる。

つまり彼の主題は、彼自身の言葉で言えば「土地の記憶」にある。人々は土地と繋がって生き死にしてゆくが、人々の代わりにいわば土地が「それ」を記憶に留める。何らかの形として記憶する。それに気付いた人（人々）が、「それ」を「土地の記憶」の中から取り出す。だから彼は「大地」、その実質である「土」を主題にする。「土」は素材でもある。

僕は、おのずと韓国の古墳文化を育んだ慶州地域の土地、自然を思い起す。あの空気と明るさと光、そしてたおやかな古墳の姿が眼に浮かぶ。

6

慶州地域の古墳を思い浮かべた僕は、またおのずと奈良や大阪を中心に広がる日本の古墳群を連想する。古墳だけを見ているとそれ程の違いはない。でも、想像のなかで俯瞰するように遠ざかっていくと、違いが、「自然条件」の違いが見えてくる。半島では（済州島を除くと）智異山でも1900メートル程だが、列島では山が深く、高い。簡略化して言えば、この自然環境そのものの違いが両者の「妖怪」の違いをもたらしているようにみえる。

山が高く深ければ、平地（平野）や盆地の世界と山の世界は別の世界を形成する。その分、「妖怪（鬼、トッケビ、超常的なもの等）」は、より人間離れたものになる。列島の「妖怪」が一樣に怖い理由の元にはそれがある。それにたいして半島では「トッケビ」は人間のすぐそば、傍らに存在している。「準人間」、「人間」とはそういうことである。そして、傍らに居る（共に在る）のは、根本的には、人間を助けるためなのだ。

僕はこんなことを思ってみる—「人乃天」という言葉から一切の宗教的、政治的、党派的な意

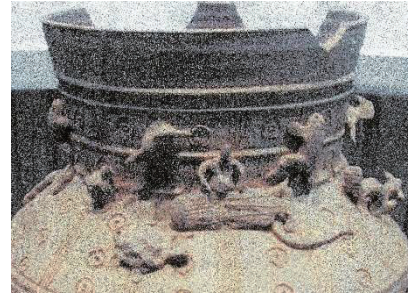
味を削り落してしまってみるなら、つまり「天」というのを大袈裟にしないで考えるなら、「人」こそが中心であり、「天（自然）」は「人」に寄り添う、そういうことなのではないだろうか。少なくとも河明求の作品から感じ取ることができるのはそういうこと、「トッケビと庶民の柔らかな関係」なのである。

それはそれとして、今から古墳時代まで遡ると、半島と列島（とその先の「大陸」）の関係はずっと緊密だったにちがいない。「妖怪」についても、例えば 13 例しか遺っていない（それだけ貴重な）『新羅殊異伝』を読んでも、その緊密な関係は明らかである。しかし、それから 1500 年ほどの時の流れは大きかった。西洋との関わりというまったく新しいことも生じた。僕には「近代化」は人々に幸せを齎したとは、俄かには思えない。しかも今後は、どう考えても世界の状況が良くなってゆく要素は、残念ながらあまり見当たらない。

それでも河明求は楽観的たろうとしている。半島と列島の関係に関してもだ。彼の《ドラえもん形埴輪》を見る僕らの顔には、自然と穏やかな笑みが浮かんでくる。



註 1



註 1



註 2



註 3

~~~~~

註 1：《土偶裝飾長頸壺》（新羅 5～6 世紀、高さ 34cm）。鷄林路 30 号古墳出土。

註 2：《裝飾子持壺付裝飾器台》倉吉博物館蔵（6 世紀、高さ 49.5cm）。重文。倉吉市の野口 1 号墳出土、埋葬儀礼用の土器。

註 3：《裝飾付器台付子持壺須恵器》奈良国立博物館蔵（6 世紀、高さ 48.4cm、口径 19.3cm）。出土地不明、埋葬の供養用の土器。



## 河明求(HA Myoung-goo) Profile

- 2009 慶熙大学校芸術・デザイン学部 陶芸学科 卒業(韓国)  
2012 Royal college of art 陶磁・ガラス専攻 交換留学  
過程 修了(イギリス)  
2013 京都市立芸術大学 大学院 美術研究科 工芸専攻 修  
士課程 卒業  
現在 東京造形大学 大学院 造形研究科 博士課程 在学中



河明求

### ■主な個展

- 2014 河明求 個展「What is the perfection??」(東京・Steps gallery)  
2016 河明求 個展「形と用」(東京・Azabujuban gallery)  
2016 河明求 個展「見えない、聞こえない、つかめない。でもたしかにあると感ずること」  
(東京・Silver shell gallery)  
2017 河明求 個展「Message hidden in humor」(東京・Azabujuban gallery)  
2018 河明求 個展「Message hidden in humor」(韓国・JISO gallery)  
2019 河明求 招待展 (韓国・ロッテデーパト本館・アビニューエル)  
2019 河明求 個展「幻の神社」(東京・Gallery Nayuta)  
2020 河明求 個展「輝かしい神ドケビ」(韓国・BON gallery)  
2021 河明求 個展「古代からの手紙」(埼玉・丸沼芸術の森)  
2022 河明求 個展「幸せな虎さん2022」(東京・Gallery Nayuta)

### ■主な展示

- 2017 朝霞市 市制施行50周年記念展「アート×朝霞」(朝霞市立博物館)  
2017 釜山ビエンナーレ「2017海の美術祭/Sea Cube/ OHASHI Hiroshi X HA Myoung-goo」  
(韓国・多大浦海水浴場)

- 2018 駐日韓国大使館韓国文化院 特別協力展示「Made in MARUNUMA 朝霞-8作家の出会い展」  
(東京・韓国文化院)
- 2019/ 2018/ 2017/ 2016 工芸トレンドフェア「海外館・丸沼芸術の森ブース」(韓国・COEX)
- 2019/ 2018/ 2017 アートフェア東京(有楽町・国際フォーラム)
- 2019 KIAF (韓国・COEX)
- 2021 アンドリューワイエスと丸沼芸術の森コレクション展(岐阜県現代陶芸美術館)
- 2021 「But Please go on 展」(韓国・水原市立美術展示館)
- 2021 「萬福展」(韓国・ソウル市教育大学校美術館)
- 2022 「静中動-韓国のスピリットをたどる-」(滋賀県立陶芸の森)

#### ■主なプロジェクト

- 2015・2017 Futaba Sports オリジナルイラスト制作
- 2017 埼玉県朝霞市公式キャラクター「ぼぼたん」制作
- 2018 駐日韓国大使館韓国文化院 特別協力展示「Made in MARUNUMA 朝霞-8作家の出会い展」  
コーディネーター (東京・韓国文化院)
- 2018 「フェルナンド・ボテロ 特別レクチャー・展示」コーディネーター (韓国・バンヤンツリ  
ークラブ&ホテル)
- 2018 BAMA 海外特別展示「丸沼芸術の森ブースコーディネーター」(韓国・釜山)
- 2020/ 2019/ 2018/ 2017/ 2016 工芸トレンドフェア「丸沼芸術の森ブースコーディネーター」  
(韓国・COEX)
- 2022 「未来へのおくりものプロジェクト」(滋賀県立陶芸の森)
- 2022 「未来へのおくりものプロジェクト」(朝霞市立博物館)



河明求がデザインした埼玉県朝霞市  
公式キャラクター「ぼぼたん」

## ■河正雄コレクション・出品作名録

|   |                 |         |      |  |  |
|---|-----------------|---------|------|--|--|
| 1 | ヘンリー・ミラー        |         |      |  |  |
|   | Amour Toujours  | 560×710 | 1974 |  |  |
| 2 | 李 禹煥            |         |      |  |  |
|   | シークレール (88/250) | 580×445 | 2012 |  |  |
| 3 | 全 和風            |         |      |  |  |
|   | 牡丹 油            | 530×455 | 1980 |  |  |
| 4 | 許 勳             |         |      |  |  |
|   | 金剛山 油           | 652×530 | 1961 |  |  |
| 5 | ケーテ・コルヴィッツ      |         |      |  |  |
|   | 両手を重ねる女性 版画     | 286×228 | 1898 |  |  |
| 6 | 郭 桂晶            |         |      |  |  |
|   | 白磁・収穫 版画 (2/10) | 640×490 | 1980 |  |  |
| 7 | 孫 雅由 (2点組)      |         |      |  |  |
|   | 色の位置 油          | 215×270 | 1987 |  |  |
|   | 色の位置 油          | 215×270 | 1987 |  |  |
| 8 | 市橋とし子           |         |      |  |  |
|   | 春探し 人形          | 高さ 180  | 1951 |  |  |

## ■江上越・出品作品名録

|    |              |          |      |  |  |
|----|--------------|----------|------|--|--|
| 1  | コミュニケーション    | HA2020   |      |  |  |
|    | 油彩 アクリル      | 90×60×95 | 2020 |  |  |
| 2  | コミュニケーション-1  | HA1940   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 3  | コミュニケーション-2  | HA1944   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 4  | コミュニケーション-3  | HA1949   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 5  | コミュニケーション-4  | HA1954   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 6  | コミュニケーション-5  | HA1954   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 7  | コミュニケーション-6  | HA1956   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 8  | コミュニケーション-7  | HA1958   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 9  | コミュニケーション-8  | HA1960   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 10 | コミュニケーション-9  | HA1963   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 11 | コミュニケーション-10 | HA1963   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 12 | コミュニケーション-11 | HA1964   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 13 | コミュニケーション-12 | HA1966   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |
| 14 | コミュニケーション-13 | HA1987   |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455  | 2021 |  |  |

|    |              |         |      |  |  |
|----|--------------|---------|------|--|--|
| 15 | コミュニケーション-14 | HA1988  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 16 | コミュニケーション-15 | HA1995  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 17 | コミュニケーション-16 | HA1995  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 18 | コミュニケーション-17 | HA2003  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 19 | コミュニケーション-18 | HA2011  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 20 | コミュニケーション-19 | HA2020  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |
| 21 | コミュニケーション-20 | HA2020  |      |  |  |
|    | 油彩 キャンバス     | 530×455 | 2021 |  |  |

## ■河明求・出品作品名録

|    |                         |                             |             |      |  |
|----|-------------------------|-----------------------------|-------------|------|--|
| 1  | 私が大好きな食べ物と悪い権力者です       |                             |             |      |  |
|    | 陶、白金、漆、スワロフスキー          | 210×160×310                 | 2017        |      |  |
| 2  | 幸せの呪文                   |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆、スワロフスキー        | 200×150×410                 | 2019        |      |  |
| 3  | 白いウィザード                 | 陶、金、白金、銅、漆                  | 130×120×230 | 2021 |  |
| 4  | 幸運の種                    |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆、スワロフスキー、木      | 140×140×270                 | 2021        |      |  |
| 5  | 回帰                      |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆、スワロフスキー        | 本体：190×160×230 花：120×80×130 | 2022        |      |  |
| 6  | 守り神                     | 陶、金、白金、漆                    | 200×150×250 | 2021 |  |
| 7  | 誰かのための新大陸               | 陶、金、白金、漆                    | 200×250×200 | 2021 |  |
| 8  | 幸せなクジラ                  | 陶、金、白金、漆                    | 160×280×150 | 2021 |  |
| 9  | 幸せな亀                    |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆、スワロフスキー        | 200×300×200                 | 2021        |      |  |
| 10 | 恐怖を乗り越えて気付いたこと          |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 220×200×210                 | 2021        |      |  |
| 11 | Mask series (BiBi-Mask) |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 230×100×320                 | 2021        |      |  |
| 12 | Mask series (方相氏)       |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 320×120×380                 | 2021        |      |  |
| 13 | Mask series (白虎)        |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 180×100×170                 | 2022        |      |  |
| 14 | Mask series (青虎)        |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 200×100×150                 | 2022        |      |  |
| 15 | Happy Tiger (Blue)      |                             |             |      |  |
|    | 陶、金、白金、漆                | 350×200×270                 | 2022        |      |  |
| 16 | マスク装飾人物形直輪              | 陶                           | 150×150×390 | 2021 |  |
| 17 | 現代のメッセンジャー              | 陶                           | 280×120×240 | 2021 |  |
| 18 | ここが私の家です                | 陶、漆                         | 250×250×280 | 2021 |  |
| 19 | 土偶付き特殊器台                | 陶                           | 170×150×310 | 2021 |  |
| 20 | 土偶付き長頸壺                 | 陶                           | 200×200×270 | 2021 |  |
| 21 | ドラえもん形直輪                | 陶                           | 130×130×290 | 2021 |  |

(※ 作品サイズの単位はミリメートル)



江上越



コミュニケーション-1 HA1940



コミュニケーション-6 HA1956



コミュニケーション-8 HA1960

河明求



私が大好きな食べ物は悪い権力者です



Mask series (BiBi-Mask)



マスク装飾人物形埴輪